



社会福祉法人武藏野会

なぜ福祉法人が「デザイン」を掲げた取り組みを行うのでしょうか。それは、今はまだ福祉の外部の人たちに福祉の本質を伝え、体験してもらうことを通じて、福祉を外部へと拡張し、だれもが「普段の暮らしの幸せ」を享受できる社会をつくりていきたいと考えているからです。

福祉とは、障がい者や高齢者のサービスという狭い意味に閉じ込められる言葉ではありません。

福祉とは、私たちだれもが当然享受されるべき「ふだんのくらしのしあわせ」そのものを意味する言葉です。つまり、この地球上に生きる人たちすべてにつながる言葉であり、福祉に関わりのない人など本来いない。福祉は、そもそもだれに対してもひらくかれているはずです。

ですが、実際はどうでしょうか。福祉とは、なんらかの困りごとを抱えた当事者に対するサービスだと捉えられ、専門的な知識や資格を持った人たちだけが取り組むものになってはいないでしょうか。その結果、福祉は社会から遠ざかり、多くの人にとって「自分には関係のこと」となり、逆に、当事者や支援者、福祉職の負担が大きくなっているようにも感じます。

福祉の担い手が減り続けているいま、福祉の内側だけでなく、外側にいる人たちとのゆるく広い関わりを模索していかなければ、次の時代の担い手を育てるとはおろか、目の前の人々の暮らしを支えることも難しくなってしまいます。私たちは、今まで以上に福祉の外側にいる人たち、地域の人たちや企業との協働、「地域福祉」を意識しなければならないのだと思います。

福祉の楽しさや面白さを伝えるべき、というわけではありません。福祉の現場には葛藤やモヤモヤがつきもの。そのモヤモヤこそ、他者を知り、自分を知り、人間を知るためにの源泉になるはずです。暮らしを豊かにする「学び」で満ちている福祉の本質を、魅力を多くの人たちに伝えることで、誰にとっても関係のある「ふくし」へひらくことを願っています。それが私たちの願いです。

その時、力を発揮するのがデザインです。内側と外側のコミュニケーションを整理し、円滑にすることなく、価値を的確に他者に伝える力がデザインにはあります。私たちは、これまで以上にデザインについて探究し、デザインの担い手と協働し、その力を借りながら、福祉の内と外を行き来し、多様な人たちとシームレスな関係をつくりたいと思っています。

このあと、なにが成果として残るのか。私たちにもわかりません。だからこそ始めるのです。わからないからこそ私たちは考え続け、対話を続け、変化し学び続けようとする。それはまさに福祉がやってきたことでもあります。「わたし」と「あなた」が、お互いを響かせあい、相互に変容し、それぞれが自分たちの持っている力を発揮できる社会を目指して、私たち「ふくしデザインセンター」は、福祉を「ふくし」へとひらくデザインを実践してまいります。

デザインによってひらかれる、ふくしの仲間さがし



福祉を「ふくし」へひらく デザインとひらく

福祉を、デザインの力を借りて、だれにでも関係のある「ふくし」へとひらく。

武藏野会は、2022年から、そんなテーマを掲げながら、実験的な取り組みを続けてきました。福祉を外側へと拡張し、魅力を伝え、地域の人たちや次の時代の担い手たちとの関わりを切り拓いていかなければ、福祉はあつという間に「一部の人たちの取り組み」になり、本来持つ力を失って、目の前の人たちを支えることすら難しくなってしまう。そんな危機感があったからです。取り組みの中核となるのが、法人内外の多様な人たちが集い、対話や実践を通じて学び合う「ふくしデザインセンター」の構想です。私たちはこの2年、外部のみなさんの力を借りて「設立準備室」を組織し、実践と対話を積み重ねました。センターそのものが完成したわけではありませんが、構想を掲げて実験的に活動するなかで、私たちは「ふくしのデザイン」を少しずつですが表現できるようになつたと感じています。この冊子は、2年余りの取り組みをまとめたものです。ここから、みなさんの次のアクションが生まれることを願っています。

社会福祉法人武藏野会 理事長 / ふくしデザインセンター設立準備室 高橋 信夫

多様な参加者が、お互いの領域を越えて学び合う場を地域のなかにつくること。それが、私たちのミッションです。他者との共通体験や対話は、相手を、そして自分を知ることにつながり、相互の変化を生み出します。そしてその先で、新たな理解者や担い手、仲間が見つかっていく。ふくしデザインセンター構想とは、デザインによってひらかれる「ふくしの仲間さがし」なのかもしれません。

これまでの取り組み

2022年度

ふくしデザインゼミ2022

福祉やデザインに関心のある学生が武藏野会の施設や職員を取材。「ふくしに関わる人図鑑」の制作や展示会の企画を通じて、それぞれに「ふくし」を考える学習・体験プログラム。2023年度グッドデザイン賞を受賞。



→ P4-5

2023年度

ふくしデザインゼミ2023-24

2回目となるゼミは、東京・八王子、伊豆大島、滋賀・高島、長崎・諫早の4地域に分かれ、ゼミ生たちが実際の福祉法人とともに「ふくしをひらくアイディア」を考える形式に。ゆたか会と南高愛勝会の2法人が新たに参画しました。



→ P12-13

Work in Local × Social

ローカルでの暮らしを志向する若者20名が、伊豆大島「大島恵の園」を舞台に福祉の仕事と地域活動を両立する「半福半X」を構想。そのアイディアをプレゼンテーションする企画。地域福祉の新たなビジョンが生まれました。



→ P6-7

武藏野会の仲間さがし(25卒採用)

前年度に続き「仲間さがし」をテーマに採用ツールの開発、動画の制作などを进行了。「ふくしデザインゼミに興味を持った」という学生が説明会に複数訪れるなど、個々の取り組みが有機的につながってきています。



→ P14-15

武藏野会の仲間さがし(24卒採用)

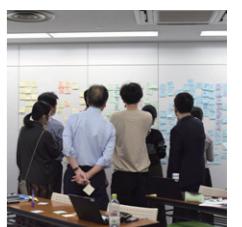
クリエイターとともに武藏野会の採用コンセプトを全面的に修正し、「仲間さがし」をキーワードに、採用サイト、パンフレットなどを新たに制作。「仲間」となった新たな職員は、すでに私たちの現場で働いています。



→ P8-9

ふくしデザイン会議

ふくしデザインセンター設立準備室のメンバーが武藏野会本部に集まり、「ふくしとデザイン」をテーマにさまざまな対話ワークショップを実施。地域福祉におけるデザインの重要性を確認しながら、武藏野会の未来を構想。



→ P16-17

ふくしデザインゼミ 2022

実施時期 | 2022年8月～2023年3月

実施場所 | 東京都八王子市、小平市、練馬区、文京区、千代田区ほか

取り組み | フィールドワーク、取材・執筆、冊子の制作、展覧会、オープンフォーラム



分野や領域の垣根を越えた実践的な学びのプログラム

ふくしデザインゼミは、さまざまな分野の学生たちが社会福祉法人を舞台に学び合う実践的な学びのプログラム。2022年から23年春にかけて行われた第1回は、武蔵野会の各施設や周辺地域が舞台となりました。13名のゼミ生たちは5ヶ月もの間、各施設をめぐり、武蔵野会の職員、地域住民、行政関係者など18名を取材。「その人らしさ」を伝えるべく、文章やキャッチコピーを自ら書き上げ、『武蔵野会に関わる人図鑑』の制作に挑みました。ふくしに関わるさまざまな人たちの声を聞き、自分のフィルターを通して言語化し、取材対象と意見をすり合わせながら図鑑を書き上げた学生たち。取材や対話を通じて福祉の現場の輪郭に触れ、武蔵野会の職員たちに通底する

理念を感じ取りながら、自分ごととして存在する「ふくし」の広さを学んだようです。インタビューを通じて武蔵野会の考えに共感した学生が実際に入職するという動きも生まれました。オープンフォーラムなどのイベントを含めると、実に446名の人が武蔵野会の理念に触れたことになります。ゼミの構想、プログラムの設計・実施には、一般社団法人ぼくみんなのみなさん、デザイナーの田中悠介さんら外部のみなさんも関わり、本部の職員とも議論を積み重ねながら運営を続けてきました。「外部人材との協働」という新しい動きは、その後の「ふくしデザインセンター構想」にも引き継がれています。



1
Feature



2
Feature



3
Feature

ゼミ生たちが小冊子を制作

完成した『武蔵野会に関わる人図鑑』。76ページと内容盛りだくさん。学生たちが取材した武蔵野会職員も多数登場します。武蔵野会を中心とした、ふくしに関わる人たちの関係性を可視化した「相関図」は必見。

対話を通じて福祉を知る

福祉法人に関わるのははじめてという学生も取材に参加。対話を通じて福祉の魅力を知れたと語る学生も多數いました。多様な人たちと地域の福祉を支える「地域福祉」の一つの形が、ゼミを通じて見てきました。

ひらかれた場づくり

ゼミ生たちの学びのプロセスや図鑑の一部を展示した『ふくしデザインゼミ展』も好評でした。ゼミ展の関連企画として、八王子市のクリエイトホールで開催したオープンフォーラムには100名を超える参加者が集合。

Process



各地域の施設をめぐるフィールドワーク。はじめての土地を歩きながらの対話が、学びを深めます。



講師のアドバイスを受けながら、ゼミ生たちは自分たちでレイアウトを考え、冊子を制作してきました。



福祉、まちづくり、デザインなどをキーワードに、各界のゲストを招いてのオープンフォーラム。



AKITEN BASECAMP GALLERY(八王子市)で展覧会を開催。来場者に過程や成果を共有しました。

Comment

ふくしデザインゼミ展 ギャラリー・オーナー

ひらかれた側はどうする？

及川 賢一 NPO法人AKITEN 代表／八王子市議会議員



「ふくしデザインゼミ 2022」の会場となった西八王子のアートギャラリーを運営しています。「ふくしを社会にひらく」というテーマで開催されたこの企画は、学生たちが制作した「ふくしに関わる人図鑑」に関する展示と、トークイベントを中心に構成されました。しかし、「ふくしを社会にひらく」というテーマのとおり、福祉以外のさまざまな分野からも来場してもらうことができました。とくに、ふくしデザインゼミが誕生した経緯や、参加学生の本音、ふくし×まちづくり、デザイン、ローカル、はたらくなど、さまざまなテーマで毎日開催されたトークイベントは、連日連夜の盛り上がりとなり、本イベントをきっかけとした新たな交流が生まれていたように思います。私自身もこの企画を通じて知り合った福祉団体が主催するワークショップや講座などに足を運ぶようになりましたし、参加者同士の

つながりによるアクションも起こっています。人は、福祉に関わらず一生を終えることはできません。今は福祉と無関係だと思って生活している人も、自身や家族、友人などを含めて、人生のどこかで福祉との接点を持つことになります。そんな、今は他人ごとでもいつかは関わる福祉を、今のうちから自分のこと、地域のこととして考える機会を「ふくしデザインゼミ展」は与えてくれたと感じています。一方で、福祉を社会に広げていくためには、福祉側がひらくだけでは十分ではありません。ふくしデザインゼミ展をきっかけに福祉が社会にひられた後、ひられた側はなにをすべきなのか？ 福祉側にひらいてもらうだけではなく、自身や地域をてくれた可能性を今後の地域づくりに活かしていきたいと思います。

Work in Local × Social

実施時期 | 2022年8月～
実施場所 | 東京都大島町
取り組み | 伊豆大島をフィールドとしたリサーチ、プレゼンテーション



福祉と地域がクロスオーバーする働き方を構想

武蔵野会が運営する「大島恵の園」、「第2大島恵の園」がある伊豆大島を舞台に、地域と福祉の架け橋をつくるような働き方、福祉との関わり方を考え、地域に実装しようというプロジェクト。ローカルでの暮らしを志向する若者20名が、1泊2日のフィールドワークを経て、福祉の仕事と大島での地域活動を両立する「半福半X」のライフスタイルを構想。その具体的なアイディアを70名もの観衆にプレゼンテーションしました。

フィールドワークでは、プロジェクトパートナーで編集者の影山裕樹さんとともに、地元の名所、自然、食などを堪能。現地のゲストハウスオーナーやデザイナーからもレクチャーを受けながら、具体的な活動のアイディアを考え

ました。はじめての土地でのリサーチ、対話、思考、そしてプレゼンに至るまで、参加者たちは濃密な時間のなかで自分を見つめ直し、福祉、そして大島の魅力と課題を「自分ごと」として捉えたようです。

活動を通じて、「半福半X」という考え方自体に対し、さまざまな方から共感が寄せられているだけでなく、大島で活動するクリエイターのみなさんとの新たな関係も構築されました。また、参加者それぞれのブラッシュアップも続いており、恵の園でカラオケ大会の開催を構想した大正大学の阿部秀飛さんが早速、恵の園にインターン。提案していたカラオケ大会を24年6月に実施するなど、「大島×福祉」の関係人口創出にもつながっています。



1
Feature



2
Feature



3
Feature

伊豆大島でフィールドワーク

景色、風、空気。そのどれもが、大島に暮らす人たちの「自分らしさ」を作り立たせているもの。島を実際に歩くことで「そこでしか成り立たない福祉」を感じながら、その地域をおもしろがる視点を学びます。

クリエイターからの学び

ゲストハウス「青とサイダー」を運営する吉本浩二さん、デザイン事務所「トウオンデザイン」を主宰する千葉努さんなど、大島で活動するクリエイターたちとの時間は、「福祉とデザイン」を考える学びに変化。

Process



参加者がまず体験したのは大島の大
自然。純粋な「楽しさ」からライフス
タイルを想像していきます。



大島恵の園の1園と2園を見学。福
祉施設の日常のありのままを感じたり、
仕事としての福祉をイメージ。



初日夜にはゲストハウス「青とサイ
ダー」での交流会。参加者・職員・地
域を越えた交流も魅力のひとつ。



プログラムの最後は70名もの大観衆
の前でのプレゼン。さまざまな人々
からのフィードバックが財産に。

Comment

Work in Local × Social プロデューサー

相互の変容を受け入れる場の力

影山 裕樹 EDIT LOCAL ディレクター／千十一編集室 代表



福祉を地域にひらく、とは言葉では容易いけれど、実際のところは難しい。だが、Work in Local × Social の参加者との議論のなかで、地域における福祉の可能性と課題について重要なテーマが見えてきたように思う。NIMBYという概念がある。日本の各地域においても、マジョリティが暮らす地域社会からマイノリティを無意識に排除しようとする圧力が存在する。そこに対する抵抗は、地域に暮らす一人ひとりの人間性に踏み込む、繊細で困難な取り組みになることは間違いない。自分は何者であるのか、自分が嫌いな他人とは誰か。他者と本当に向き合うつもりがあるのか。自分の生活は棚上げしてケアすることは本当にできるのか。地域×福祉の領域には、そんなケアの現場でもお互いに話しづらい、各々の尊厳の問題に触れる問い合わせが横たわっている。だとするならば、そういう「耳障

りの悪い」会話がしやすい、ケアする人がケアされる現場を地域につくることが重要ではないか。Work in Local × Social は、地域における福祉施設の雇用の可能性として始まったプロジェクトではあるが、もっと深い、お互いをケアし合う寛容な地域はどうやったら実現するのか、という問い合わせを備えたプロジェクトもある。たとえば具体的な取り組みとして、他者を変容させる真摯な言葉の連なりを重ねることに糸口があるかもしれないし、あるいは、自分自身の価値観をひっくり返す、そんな勇気を一人ひとりに授けるイベントを開催することにあるのかもしれない。地域で働きながら、暮らしながら、他者との出会いに揉まれることを受け入れる、その波に乗る。そんな人を増やすことの必要性に対する気づきを、生み出せたらいいと思っている。

武藏野会の仲間さがし(24卒採用)

実施時期 | 2022年1月～2024年3月

実施場所 | 東京都内はじめ全国

取り組み | 採用プランディング、採用プロセス・コミュニケーション設計、パンフレット等の制作



採用活動を「仲間さがし」に刷新

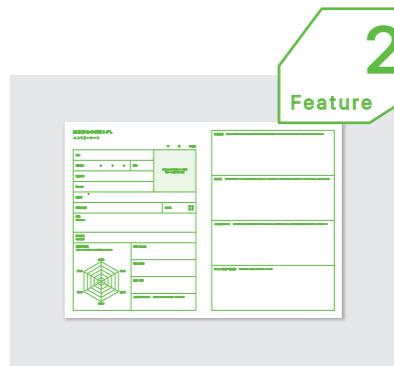
それまでは採用チーム内のキーワードにすぎなかった「仲間さがし」を前面に押し出し、武藏野会の採用活動全体を表現するキャッチコピーとして活用。そのうえで、ポスターやパンフレット、エントリーシートなどを新調しました。これ機に、本部採用担当である菅春菜さんの肩書きも「仲間さがし担当」とし、採用プロセス全体を刷新。「採用する／される」関係ではないフラットな関係づくりを理念に据える武藏野会らしい採用活動を実施することにつながりました。パンフレットは2種類を制作。写真は、八王子福祉作業所そばの公園、伊豆大島の波浮港でそれぞれ撮影しています。オモテ面では武藏野会が日々どのような理念で目の前の人たちの支援にあたっているのかを言葉にしつつ、ウラ面には

武藏野会に関するさまざまな情報をまとめました。アートディレクション、デザインは田中悠介さん。コーピーライティングを小松理恵さんが担当。二人は「ふくしデザインセンター設立準備室」にも名を連ねています。さらには、フェア出展、法人説明会、面接、面談など、仲間さがしの一連のプロセスでのコミュニケーションも見直し。法人の一方的なアピールはせず、学生と法人が等身大で相互理解を深めていくような丁寧な場づくり、コミュニケーションデザインにも取り組みました。初年度から、採用人数は前年度に比べ7人増の23人に。短期的な結果を出しながら、これまでにない採用ブランド／コミュニケーションの基盤整備という、中長期の「布石」を置くことができました。



新たなキャッチコピー

パンフレットには、伊豆大島の波浮港で撮影した写真を大きく配置。「ここじゃなきゃダメな福祉」をキャッチコピーに、地域とその人らしさが結びついていること、それを支えることの大切さを学生たちに投げかけ。



採用ツールをデザイン

エントリーシートをリデザイン。情報を整理し、自分のことを表現しやすいように配置。その人の人柄や意欲が伝わってくるシートに生まれ変わったことで、学生のことをより深く知る手がかりにすることができました。



各イベントとの連動

「仲間さがし」のコンセプトが、ふくしデザインゼミやWork in Local × Socialなどの取り組みと一貫性を持つことで、法人のブランドイメージも向上。学生のエントリー・選考・採用に変化をもたらしています。

Process



まず着手したのが採用パンフレットのデザイン。ウラ面タイトルを「武藏野会解体新書」として組織全体を紹介。

パンフレットは、就職フェア、イベント、説明会などで使用。これまで6000枚を配布しました。

「仲間さがし」という考えの背景を紹介するようなトークイベントも実施。新たなブランドとして成長しています。

2024年卒入職組の中には、この「仲間さがし」に好印象を持ち、法人に関心を持ったという人も出ています。

Comment



仲間さがし担当

「よりそう」をつなげる

菅 春菜　社会福祉法人武藏野会 本部職員

採用担当として駆けだしたった当時、新卒者の採用が年々減少してしまい、焦る気持ちがありました。そのときに思い出したのは、学生時代の進路に悩んでいた頃のことでした。武藏野会の先輩職員が、仕事で大切にしていること＝「よりそう」気持ちを、感情や言葉とともに一緒に考えてくれたんです。そのことを思い出し、あのときの寄り添いが今につながっているんだ、採用担当として仕事ができるのは、武藏野会の先輩職員との「つながり」がきっかけだったんだと、気づかされました。思えば、入職後、支援を通じて学んだことは相手に寄り添うことでした。それなのに、採用担当になった頃は採用に「つなげる」ことばかりを考え、相手に寄り添う気持ちを上手く表現できなかったと感じています。

福祉に関わる人を増やすことをコンセプトに、「仲間さがし」に変わり

ました。福祉に「よりそう」「仲間」を増やすことを目指しています。学生との関わりが増えていくなかで、「仲間さがし」を合言葉に、施設見学やインターンシップを通じて実際の支援現場や先輩職員の声に触れる場も増えています。そんな時間を通じて、学生自身も福祉の「仲間」と感じてくれているようです。学生を受け入れてくれる職員のみなさんも、「仲間さがし」の協力者として心強い存在になっています。学生一人ひとりが武藏野会に入職してどう活躍するのか、ということも大切ですが、なにより大切なのは、武藏野会の人に関わる想いを受け継ぐ仲間が増えることで、武藏野会が大切にしてきた理念が伝わっていくことだと思っています。「よりそう」を「つなげる」。そんな気持ちを持ちながら、来年度も活動をしていきたいと思っています。

職員の声

ふくしデザインセンター構想には、本部職員を中心に武藏野会職員が積極的に関わっています。ふだんの仕事とはかなり毛色の違う対話の時間。まずはお互いの共通言語を探すことからプロジェクトは始まりました。

2年あまりのアクションと対話を通じて、どのような変化があったのでしょうか。ここからは、武藏野会職員の「ことば」を通して、ふくしデザインセンター構想の意味を考えてみます。

ふくしデザインセンター設立準備室 メンバー

ふくしの周辺にいる人たちの声を伝える

津川 志帆 社会福祉法人武藏野会 本部課長



当時、本部の採用担当だった私は、学生や若い人々に福祉に興味を持ってもらいたいと強く思っていました。武藏野会への採用を増やすためには、武藏野会を、福祉を知ってもらう必要がある。福祉を身近に感じてもらえるなにかをできないか。どうしたら福祉を身近に感じてもらえるだろう。どうしたら武藏野会がそういう思いをもっていることを知ってもらえるんだろう。そんなことを考えていたときに、ソーシャルワーカーを通じて、ふくしをひらいていこうという、別の立場から似たような思いを持っている「SOCIAL WORKERS LAB (一般社団法人ぼくみん)」のみなさんと出会いました。彼らも、なにかイベントを通じて、福祉を身近に感じてもらいたいと思っているとのことでした。一緒になにができるかと考えていたときに、小松理恵さんに武藏野会の理念の話をしたら、武藏野会の理念をみんなに知ってもらう

のはどうかという話がでてきて、少しずつ、ふくしデザインゼミが具体的になっていきました。武藏野会の理念「自分を愛するようにならう」「あなたの隣人を愛せよ」の根幹にある、やむにやまれぬ思いや自己覚知、自己啓発、相互変容といったこと、その片鱗を、武藏野会の職員ではない人々に知ってもらうことが、武藏野会に関わる人々や、福祉業界、「ふくし」の周辺にいる人々の気持ちを分かってもらうことになるのではないかと私たちは考えました。イベントを通じて、それが実践できたかどうかは分かりませんが、参加した人に福祉業界や武藏野会に興味をもったと話してもらったり、一緒に働いてみたいと言つてもらったりしたときは、もしかしたら裾野が広がっているのかもしれないと思いとても嬉しかったです。この試みを通じて、福祉業界や武藏野会への理解が少しでも広まっていってくれたらと思っています。

ふくしデザインセンター設立準備室 メンバー

採用活動が「ふくし」を考える時間に

山田 貴美 社会福祉法人武藏野会 理事／本部長



「武藏野会のふくしデザインセンターと一緒につくりましょう!」そう言葉をかけられたとき、「はて? これはなにを意味して、なにを一緒にやるんだ」という感覚になりました。ふと、同席していた理事長と目が合い、理事長も私と同じように「はて?」という顔をされていたのを、今もよく覚えています。職員採用が非常に厳しいなか、武藏野会の採用活動の相談に乗ってもらってきた今津さん(ぼくみん代表)から聞いたこの言葉は、これから職員採用と一緒に協働していきましょうというキックオフミーティングの場でした。そもそも採用活動の一環だったので、ところが、活動はそれを含んで越えるものになりました。活動が始まり、約2年が経ちました。ふくしデザインセンターは、この間、さまざまな活動を進めてきました。今も手探りな状況は続き、ふくしデザインセンター

は準備室のままで、武藏野会、協働者であるぼくみん、デザイナー、ライターのみなさんを中心に、福祉に興味を持つ人、あまり興味のない人も合わせて、みんなで「ふくし(福祉)とはなんだろう」と、一人ひとりが真剣にふくしを考えてきました。もともとは、武藏野会の採用活動の一環として始めたふくしデザインセンターの活動ですが、この活動は、学生や若い人たちからも注目してもらい、昨年からの職員採用は、とくに若い人たちの採用が増えています。これは、採用に関わった武藏野会の職員が一緒にふくしを考えてきたからだと思っています。今後も、みんなでふくしを考え、一人ひとりにやさしい、生きやすい世の中を一緒に考えていきましょう。

ふくしデザインゼミ2022 参加者

私たちにはきっと、ふくしをひらく最前線にいる

堀内 希沙乃 社会福祉法人武藏野会 八王子福祉作業所 職員



ふくしデザインゼミに参加したのは、迫りくる卒業論文や国家試験の対策に取り組んでいた大学4年生の秋でした。気軽な気持ちで取り組んだ初日の取材後、実際の現場にはほとんど行っていたなかったことに気づき、このまま自分で社会福祉に携わるわけにはいかないと思いました。それからは約半年かけて取材、執筆の機会をいただき、意識したのは福祉の現場で働く方々を「一人の人間」として紹介し、福祉へのハードルを下げる。展示では、ふくしデザインゼミに関心を寄せてくださった福祉ビギナーと、実際に働く福祉のプロたちが交わることを期待しました。しかし、実際は法人職員の来場が少なく、心から不思議に思いました。入職してからは、目の前の利用者対応に必死で、ふくしデザインゼミの時ほど「福祉/ふくしとは?」など、抽象的な問いに思考を巡らせる機会は減りました。正解がない不安から、従来の支援を正解だと思い込みそうになることもあります。ただ、変化する人間相手に、毎回同じ対応でいいのか。別の可能性を考えながら対応できているのか。その日の行動や言動を振り返って再思考できたのは、他の現場の職員を取材し、他者と意見を交換し合った、ふくしデザインゼミでの経験があったからだと思います。障がい者の就労支援に取り組むなかで、「きっとこの現場も『ふくしをひらく』最前線だ!」と思いながら働いてきました。支援員であってもなくても、働く彼らの言葉に耳を傾ける人の存在が、働きやすさ、ここちよさに大きく関わると実感しています。ふくしデザインゼミをはじめとした武藏野会の挑戦によって、利用者がここちよく暮らしおきしていくにあたり、仲間が増えるような心強い感覚を抱いています。今後も、武藏野会の一員として一緒に挑戦していけたら嬉しいです。

ふくしデザインゼミ 2023-24

実施時期 | 2023年10月～2024年3月

実施場所 | 東京都八王子市、東京都大島町、滋賀県高島市、長崎県諫早市

取り組み | オープンフォーラム、キックオフキャンプ、フィールドワーク、プレゼンテーション



全国4ヶ所で繰り広げられた実践的な学びのプログラム

2回目となったふくしデザインゼミ。さまざまな分野の学生たちが社会福祉法人を舞台に学び合う実践的な学びのプログラムというコンセプトはそのままに、フィールドワークの舞台が一気に拡大。武蔵野会の施設がある東京都八王子市、大島町、さらには他法人の拠点がある滋賀県高島市(社会福祉法人ゆたか会)、長崎県諫早市(社会福祉法人南高愛隣会)の4地域で繰り広げられ、異なる講師のもとで「ふくしをひらくアイディア」を考えました。まず行われたのがオープンフォーラム。東京都北区にある東洋大学赤羽台キャンパスを会場に豪華なゲスト講師陣を迎えて行われました。そこでゼミに関心を持った参加者たちは次のステップ、キックオフゼミに参加し4つのゼミ

に分かれます。さらにそこから、講師とともに4地域へと散らばり、1泊2日のフィールドワークに参加。それぞれの受け入れ先で取材や聞き取りをし、アイディアを出し合ってプレゼンテーションに挑みました。地域に、法人に、ゼミ生に、そして自分に。短期間でさまざまなものに向き合いながら、同時にクリエイティブなアイディアも考えなければなりません。参加者にとって高い壁の連続ですが、プレゼンでは、4つのゼミそれぞれがチームワークを發揮し、すばらしいアイディアを披露してくれました。西日本の2法人も参加して行われた2年目のゼミ。地域を巻き込んだ「地域公益事業」としての新たな可能性を感じさせるものとなりました。



自分を抜け出す視点

デザイナーの坂本大祐さん、人類学者の磯野真穂さん、軽井沢で「ほっちのロッヂ」を運営する藤岡聰子さんらをゲストに、まさに領域横断的なヒントをいただいたオープンフォーラム。100名を超える若者たちが参加。

全国に広がる学び場

前年に引き続いての参加となる田中悠介さん(高島)、小松理慶さん(八王子)に加え、影山裕樹さん(大島)、竹端寛さん(諫早)の4講師とともにゼミを展開。ゼミ生たちのアウトプットも多様なものになりました。

それぞれの自己覚知

ふくしをひらくアイディアをプレゼンするのがミッションですが、そこに至るまでの対話、内省、自己覚知の時間のなかにも「ふくし」は立ち現れます。さまざまな価値観に「揺さぶられる」時間こそが、最大の学びに。

Process



多様な角度から「ふくし」を考えるオープンフォーラム。東洋大学福祉社会デザイン学部とも連携して開催。

ゼミ生たちがまずは臨んだのがキックオフミーティング。自分を少しずつ開示しながら、ゼミ生同士の関係を構築。

法人が抱える課題や思いを聞き、ゼミ生同士で意見をぶつけアイディアを活性化。対話を徹底して重ねました。

自分たちのアイディアを、人前でわかりやすくプレゼンするという難しさにも向き合ったゼミ生たち。すべてが学び。

Comment

ふくしデザインゼミ ゼミ講師

福祉にカオスと運動性を取り戻す「ふくしデザインゼミ」

竹端 寛 兵庫県立大学環境人間学部 教授

ふくしデザインゼミは、1月のキックオフの場から、既にカオスだった。二日間の大枠はあるけど、はじめましての講師・受講生とどんな風に場をつくっていくのか不透明な、即興演奏の連続。「不確実性への耐性」が「いま・ここ」で試されるような、そんな局面。僕は小松さんや田中さんや今津さんに質問しながら、何とかキャッチアップする、そんな感じだった。だがこの混沌さには、見覚えがあった。20年前、障害者自立支援法でサービスパッケージが組み込まれる以前の、障がい者運動のノリである。「制度がないなら、現場で実体化すればよい」という、カオスと運動性に満ちた世界である。僕が伺った長崎の南高愛隣会も、20年以上前から、グループホームや結婚支援などを全国に先駆けて取り組んできた。だが、制度化後にあの南高愛隣会ですら!虐待問題が起きて、法人お取り演じの一歩手前まで

いった、と今回はじめて知る。そこから、21世紀型のコンプライアンス遵守組織に変わるために、時間をかけて立て直してきた、と伺った。ふくしデザインゼミに関わるゼミ生たちは、そんな文脈を飛び越えて、南高愛隣会の職員たちに本音でぶつかるし、容赦ない質問をする。端から見ていた僕は、若干ヒヤヒヤするが、それは昔からの職員にとっては懐かしい感覚に映ったようだ。ガチでぶつかってくる=カオスと運動性を取り戻した若者たちだ、と。そう、ふくしデザインゼミの面白さは、そこにある。制度的支援にがんじがらめにならない、カオスと運動性が、このゼミにはあった。だからこそ、ゼミ生たちは目から水を出し、本気になって現場と向き合った。それは、相手法人の職員たちにも伝わった。こういう関係性のなかでの熱量の伝播こそ、カオスと運動性の賜物なのだと、改めて感じた。



武藏野会の仲間さがし(25卒採用)

実施時期 | 2023年8月～

実施場所 | 東京都内はじめ全国

取り組み | 採用プランディング、採用プロセス・コミュニケーション設計、リクルートサイト・パンフレット・PR映像の制作



武藏野会の理念を伝えるオンラインツールのデザイン

2024年度の採用活動も、前年度に引き続き「仲間さがし」のコンセプトを継続。そのうえで、新たに「ここちよい関わりを求めて」という宣言文を付け加え、リクルートサイトを新しくデザインしました。また、小平福祉園の日常を記録したリクルートムービーをリリースしたほか、これまで活用していた「マイナビ」など外部サイトの情報、文章などについても大幅な見直しを行い対外的なメッセージを統一。一貫した採用ブランドを構築しました。

オンライン上の入り口を整えたことで、採用全体にポジティブな効果が出てきています。友人や同級生が「ふくしデザインゼミ」に参加したという学生や、これまでの取り組みに興味を持ってエントリーしてくる学生が増えています。そ

れだけでなく、理念にも共感したうえでエントリーしてくれる学生の母数も確実に増えていて、2025年度の早期エンターにおいても前年度を上回る反響が出ています。

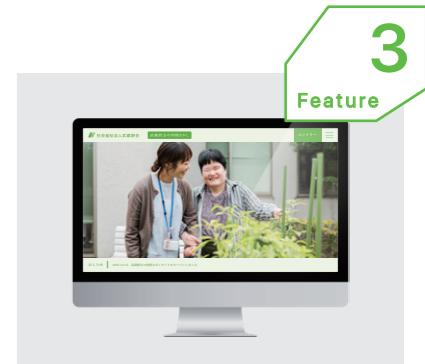
採用チームの体制も強化し、学生との密なコミュニケーションを重ねるなかで、武藏野会の理念に共鳴してくれる仲間との出会いを広げることができます。入職前には、同期とのつながりをつくり、自分や武藏野会への理解を深める「内定者ゼミ」を全6回実施し、内定者フォローも充実させています。大切な仲間たちが長く働き続けることができるよう、各拠点と連携して採用・育成・定着のステップを一貫して重ねていける「仲間づくり」をみなさんと構築していかなければと思います。



1
Feature



2
Feature



3
Feature

新たなムービーが完成

現場に行ったことのない学生に支援や職場の雰囲気を感じてもらうために映像を制作。撮影・編集は衣笠奈津美さん。小平福祉園の職員の1日を、穏やかな映像にまとめています。



Process



2年目のパンフレットは写真を新調。両手で広げて見られる大判サイズなので、可読性が高いパンフレットに。



パンフレットに引き続き採用ムービーを撮影。小平福祉園の日常をスケッチするような作品になりました。



リクルートサイトの新コンテンツとして職員の対談記事を掲載。穏やかな雰囲気のなかで対談できました。



24卒採用で新しく仲間になったみなさん。この流れを絶やすことなく、25卒採用に活かします。

仲間さがし担当

仲間とともに、仲間をさがす

萬歳 佳奈 社会福祉法人武藏野会 本部職員

2023年8月より武藏野会の「仲間さがし担当」となり、どうすれば武藏野会の魅力が学生の心に残るのか、悩み立ち止まる日々でした。前を向き続けられる原動力となったのは、日々新たに出会う学生のパワーと、武藏野会に関わるみなさんへの信頼と安心によるものでした。採用に関わる過程で、学生や武藏野会職員、ふくしデザインゼミの関係者と関わり、じっくりと話すことで、「仲間さがし担当」だけが採用を背負っているのではなく、武藏野会に関わるすべての人が業務を横断して一丸となり、チームとして「仲間さがし」を行っているんだ、ということを実感できたからです。

武藏野会が一人の学生と関わる時間は、実は多くありません。インターンシップ、ふくしデザインゼミ、フェア、実習、見学、選考プロセス、そしてメールや電話、オンライン面談といったところでしょうか。そし



て、仲間さがし担当が伝えられることにも限界があります。ですが、「仲間」である武藏野会の職員や夢あふれる利用者の声、理念をもとにした武藏野会らしい支援や活動がそこに加わると、何倍ものパワーに膨らんで、学生=「新たな仲間」の心に書き続けるんです。約一年、それを実感してきました。仲間さがし担当として学生と武藏野会両方の立場になりつつ、お互いが大事にしている思いや魅力を発揮できはじめて、「ここちよい」「ともに歩んでいきたい」と思える関係ができるのだと思いますし、その両者をつなぐ架け橋となるような存在が「仲間さがし」に求められるのではないかと思っています。理念を共有した仲間がいる心強さを感じつつ、悩んだときには武藏野会の理念である「自分を愛するように、あなたの隣人を愛せよ」に立ち返りながら、みなさんとともに「仲間さがし」を行っていきます。

Comment

ふくしデザイン会議

実施時期 | 2023年6月～2024年3月

実施場所 | 武藏野会本部

取り組み | 未来構想ワークショップ、相互対話



福祉を「ふくし」にひらく未来構想プロジェクト

ふくしデザインセンター設立準備室のメンバーが月に1度、武藏野会本部に集まり、さまざまな対話を交わす場を「ふくしデザイン会議」として定期開催。デザイン、まちづくり、採用と毎回異なるテーマを設定したうえで、ワークショップ、勉強会などさまざまな手法で6回の対話を積み重ねました。武藏野会の内外の人たちが同じテーブルで対話することにより、これまでにない角度から福祉事業、地域福祉を考えるきっかけとなりました。

デザイン会議のメンバーは、高橋理事長、山田本部長、岡部施設長、本部職員に加え、一般社団法人ぼくみんの職員、本部のアルバイトやぼくみんのインターン生など若者世代、さらには、ふくしデザインゼミを通じて関係がで

きた外部法人の職員なども含まれます。それぞれが持つ専門性や当事者性を活かし、社会福祉法人による地域公益事業のあり方、これからの時代に必要とされる社会のデザインについて議論し、学びを深めました。

法人幹部だけで決めるのではなく、外部人材や未来世代も交えて、お互いが語る言語の違いを認識しながら社会福祉法人の未来を考えていく。簡単ではありませんが、こうした「越境的組織づくり」は、地域福祉が求められる今の時代に必要なものだと考え、私たちは対話を続けてきました。会議で得られた知見を、国や自治体、民間企業、職員のみなさんに共有しながら、これから時代に求められる福祉をデザインしていきます。



1
Feature



2
Feature



3
Feature

メンバー同士の学び合い

デザイナーの田中悠介さんはデザインについて、編集者で地域活動家の小松理度さんからは地元・いわき市での実践について解説。それぞれの専門性・地域性を活かした言葉が交わされました。まさに「越境的組織」。

外部人材との協働

社会福祉法人南高愛勝会で採用や組織づくりに関わってきた松友大さんら、福祉に精通した外部メンバーも加わり、ふくしとデザインのよりよい関係について模索を続けてきました。メンバー全員で知見を蓄積。

Process



デザイナーの田中悠介さんによるレクチャー。理事長も本部長も一緒になって「デザインとは?」を学びます。



デザイン会議では、毎回ワークショップを実施。常に考え方言語化しながら対話を重ねて未来を構想しました。



できるだけ「教える／教えられる」という関係にならないよう、若者世代が会議をファシリテート。



他法人の職員も会議にオブザーバー参加し議論を深めました。取り組みが、全国から注目を集めはじめています。

Comment

ふくしデザインセンター設立準備室 アドバイザー

制度を超える「ふくしデザイン会議」

松友 大 合同会社黒子サポート



「ふくしデザイン会議」には、障害福祉制度を相対化するヒントがある気がしています。障害福祉は、障害者総合支援法という法律に沿って運営されています。法には報酬とペナルティが事細かに決められています。そのため、今、「よい福祉事業者」とは?と問われると、「制度を熟知している」という答えが返ってくるように思います。もちろん、障害福祉事業を継続する上では、法制度を熟知していることは大切なことです。一方、法制度を熟知すればするほど、それが内面化されることに注意しなければなりません。たとえば、制度として定められていることがよい支援で、そうではない支援はしないでよいこと、というように。「よい福祉事業者」とは、法律・制度を熟知し、かつ制度を相対化し続ける、ということだと思いますが、そのためにはこの一見、相反することを成立させなければなりません。とりわけ、制度のなかにあって、制度を相対化するのは困難なことです。そのヒントが「ふくしデザイン会議」にあるのではないでしょうか。

会議には、学生も参加して、職員との対話を重ねています。これは簡単に答えが出るテーマではありません。対話を通じて、職員は自分の支援や価値観を問い合わせ直すことになり、そこに“ゆらぎ”が生じます。この“ゆらぎ”こそが、制度を相対化する視線につながります。“ゆらぎ”に加えて、もう一つ大事なことは、会議やゼミなど一連の取り組みが、福祉に関わったことのある人を創造していることです。障害福祉は一部の専門家のみで行けばよい、というものではありません。ゼミを通じて、“関係者”が増えることで、より豊かな福祉事業につながると考えています。

外部の声

ふくしデザイン会議

およそ1年間にわたって繰り広げられたふくしデザイン会議。コアメンバーだけでなく、実は、これまでに関わりができた外部の法人職員、大学生たち、若い世代たちにも参加してもらいました。武蔵野会の外にいる人々は、この活動をどう見たのでしょうか。「ふくしをひらく」という私たちのビジョンはどのように届いたのでしょうか。外部の人たちにも耳を傾けていきます。



社団医療法人養生会
かしま病院 事務部部長代理
大平 佳央

法人の未来を、組織「外」の人たちと一緒に考えるということだけで難しさを感じるのに、理事長や本部長など幹部職員も参加し、率先して対話に参加するというスタイルに驚かされました。また、外部から関わるみなさんからも、武蔵野会を理解しようと努める様子が伺えました。外部の人たちと一緒に構想するからこそ、地域にはみ出たビジョンや事業につながっていくのだと思います。私たちも、福島県いわき市で地域のみなさんと医療のこれからを模索する活動を進めていますが、法人の要となる採用や教育、プランディングといった事業に「外部組織」が伴走するという組織のカタチは、今後ますます求められていくのだろうと改めて感じました。



株式会社アイズケア
専務取締役
野村 隆裕

自分の身近なところに福祉は存在しているのに、福祉に距離を感じてしまう人がいるのはなんだろう。そんなことを考えながら仕事に携わってきました。しかしながら、私自身、制度ビジネスの枠組みのなかでの業務に追われるなか、本質を見失っているように感じる瞬間もありました。今回「ふくしデザイン会議」に参加し、「ふくしをひらく」とはどういうことか肌で感じることができました。業界を超えた関わり、世代を超えた関わり、そうした関わりのなかで生まれる対話が、ふくしの関係人口を増やしていくことにつながるのだと。こうした場を続けることで、必ずしも福祉の仕事に就かなくても、誰かを気遣うこと、または関心を持つことが自然と行える人が地域のなかに増えていく。その先に「豊かで安心できる暮らし」が待っているのだと強く感じました。私たちが活動する滋賀県彦根市においてもこうした場をつくっていきたいと思います。



宇都宮大学 地域デザイン科学部
特任研究員
前野 有咲

はじめのころに抱いていた「福祉の外側にいる私が、法人の未来構想を考える場に参画するなんて恐れ多い」という思いが、終わったころには「武蔵野会の未来と一緒に考えていきたい」という思いへと変化していました。武蔵野会のみなさんにとって「ふくし」や「デザイン」を自分ごととして考える機会になった「ふくしデザイン会議」は、私にとって「福祉」を自分ごととして考える場になっていたからだと思います。「効率」や「生産性」を追い求める世界では、背景の異なる人たちと膝をつき合わせて、じっくりと話す機会はそう多くはありません。今後も、その場にたまたま居合わせた隣人と言葉を交わすことから「ふくし」を考えていきたいです。

若者の声

大川 瑞稀

社会福祉法人武蔵野会 仲間さがしアルバイト
Work in Local×Socialへの参加をきっかけに、仲間さがしに参画

大森 美歩

一般社団法人ぼくみん 職員
2023年2月、武蔵野会の仲間さがしに参画

円城寺 遥香

社会福祉法人武蔵野会 小平福祉園 職員
ふくしデザインゼミ2022への参加をきっかけに、武蔵野会に入職



ひらかれた会議から生まれたうねり

大森 私たちは、それぞれの立場から「ふくしデザインセンター構想」の取り組みに関わってきました。今回は、「ふくしデザイン会議」に参加してみて、印象に残っていることを聞いていきたいと思います。

円城寺 私は、理事長や本部長をはじめ、役職のある方と話した対話の時間が印象に残っています。ワークショップでは、毎回5人ぐらいの少人数グループに分かれて対話を重ねましたが、目の前に座っていた理事長が悩みながら自分の考えを語っていたんです。組織のトップを務める理事長だから、どんなときでも完璧だろうと思い込んでいたため、正直驚きました。

大森 たしかに、理事長である前に、一人の人として出会える感覚がありましたね。

円城寺 この4月から武蔵野会で働きはじめて、日々いろんな壁にぶつかっていますが、あの時の理事長のように、きっと先輩たちも悩みながら支援に向き合っているのかもしれない、ひとりじゃないのかもと思えたら気持ちが楽になりました。

大川 ふくしデザイン会議は、いつもなごやかな雰囲気が流れていて、いい意味で会議っぽくなかったのが印象に残っています。少人数はもちろん、全体で意見を発表する場面でも、みんなが自分の声を聞いてくれている感じがありました。

大森 仲間さがしチームでは、ふくしデザイン会議で行われていたワークショップの手法を、さっそく内定者ゼミの企画に取り入れてみました。その会は内定者のみなさんにとても好評で、仲間さがしチームでも「やれてよかったね」と話していました。

円城寺 内定者の一人として私も参加しましたが、お互いのことを深く知れて楽しかったです。こうして、気軽に話したり関わり合う場が広がることで、エンパワーメントされる職員の方も多いんじゃないかなと思います。

大森 このような取り組みは、現場の仕事との関係性がなかなか見えづらいかもしれません。でも、採用に関わる私としては、いろんな角度や視点で「福祉」を考えるきっかけになりましたし、冒頭で円城寺さんが話していたように、思わぬ形でさまざまに波及していく取り組みだと感じます。

大川 福祉を専門に学んでいる／いないに関わらず、「人を大事にしたい」と思っている人は、いろいろな形で「ふくし」への関わりしきがあると知ってほしいですね。ふくしデザイン会議に参加して、ふくしの多様さを学びました。

大森 円城寺さん、大川さんありがとうございました。今後は私たちが、ふくしをひらく小さな場をつくっていきたいですね。

クリエイティブアドバイザリーの声

ふくしデザインセンター設立準備室 アドバイザリー

「ふくし」と「社会」の関係性をつくる

田中 悠介 designと代表／デザイナー



最初に、武藏野会さんにふくしデザインゼミのプログラム案をご提案させていただいたときから3年近く経ちました。これまで、いくつかの福祉法人のプランディングや採用まわりのデザインのお手伝いをさせていただきましたが、このように多面的かつ継続的に関わらせていただける機会はそう多くはないので、僕にとっても非常に学びの多い機会になっています。

福祉分野のお仕事をさせていただくなかで、福祉の内と外での分断をすごく感じさせられます。僕自身、仕事で関わるまで福祉というものを意識したことがなかったし、実際、僕たちの普段の暮らしのなかで家族とかそういう近しい人を除いて、高齢者とか障がいのある方と接する機会はほとんどありません。でも本来は、そういうわかりやすいものだけでなく、電車で席を譲るとか、ちょっとした助け合いや思いやりも広い意味での「ふくし」と言えると思います。

ひらがな「ふくし」に込めたもの

では、「福祉ってもっと身近なものなんだよ」って感じてもらうにはどうしたらいいか? 「ふくしデザインゼミ」にしても、「ふくしデザインセンター」にても、今回「福祉」をひらがなで「ふくし」と使っているのは、「福祉」をひらくというメッセージを込めています。いま、制度とかサービスのイメージが先行して一部の人のものになってしまっている「福祉」という言葉を、みんなのものにするためとも言えます。

なぜそこにデザインという言葉がついているか?なぜデザインが重要なのか?僕は、デザインというのは「関係性をつくること」だと考えています。それは、あるモノやサービスがあったときに、受け取る側(消費者、あるいは社会)との関係性をつくる必要があるからです。どんなモノか、どんなサービスかを伝え、それが「いい」「よさそうだ」と感じてもらえてはじめて使ってもらえる。では、「ふくし」と「社会(みんな)」のあいだにどんな関係性をつくるか。まさにデザインだな、と。

「ふくし」をひらく実践とその先

実際、「ふくしデザインゼミ」の参加者には、福祉を学ぶ若者だけでなく、デザインや建築、その他さまざまな分野を学ぶ若者たちが集っています。福祉法人を舞台に、福祉やデザイン、ローカルなどに関心のある若者たちが「ふくしをひらく」アイディアを考える。それは、僕たち講師が一方的に教える学びではなく、さまざまな専門性や興味関心を持つ人たちが、立場や領域を越えて学び合う場です。ここでは、これまで福祉を学んできた人がデザインという概念に触れて、あるいはデザインを学んできた人が福祉という現場に触れて、お互いに考えが広がり、影響を与え合います。最終的に考えたアイディア自体も大事なのですが、この双方の作用こそが、まさに「ふくしをひらく」小さな実践になっていると思います。

そして、その延長に「ふくしデザインセンター構想」が動き出しています。「ふくしデザインゼミ」で実践してきた「ふくしをひらく」ことを、より組織全体あるいは社会に対して実装していく。まさに、「ふくし」と「社会」の相応しい関係性をつくっていこうとしている場と言えると思います。

田中 悠介 (たなか ゆうすけ)

1985年大阪生まれ。大学院まで建築を学ぶも、建物を建てるだけでなく、あらゆる領域の課題に対してニュートラルな視点を持って解決できるようになりたいと思い、デザイナーになることを決意。数社のデザイン事務所を経て、2016年に「designと」を設立。デザインの分野にとらわれず、さまざまな領域の課題に取り組む。

ふくしデザインセンター設立準備室 アドバイザリー

ふくし実践者を育てるハブとしての福祉施設

小松 理虔 ヘキレキ舎 代表／地域活動家



武藏野会の職員のみなさん、この冊子を手に取ってくれたみなさん、こんにちは。小松理虔と申します。普段は、福島県いわき市で編集者として働いています。福祉の仕事に就いたことはないのですが、地域のプロジェクトや文章の執筆などを通じて福祉に関わるみなさんと一緒にすることが結構あり、武藏野会のふくしデザインセンター構想に関わることになりました。

福祉施設をめぐるうちに、福祉施設というのは「おもしろい場所だな」と思うようになりました。なんというか、人の本来の姿というか、人が人でいることの根源というか、そういうものが感じられてくる。それに、「障がい」とはなんだろう、人が生きていくことはなぜこれほど難しいのだろう、なんてことも考え込んでしまいます。不思議ですね。そういうモヤモヤも含んだ「おもしろい」なんです。それでもう一つ。その人が生身でいられるには、だれかのケアが必要なのだ、ということもよく見えてくる気がします。

一方で、「おもしろい」とか言ってられるのは、気楽な立場で訪れているからだというのもわかっています。働いているみなさんからすれば、施設は仕事の場です。「こっちは仕事しててのに見せ物かよ」とか、「お前らは楽しそうでいいな」という感想を持たれるかもしれない。それでも思うんです。あなたの仕事の場を、みなさんの考え方を、ちょっとでもいいから私たちに見せてほしい。みなさんの仕事場は、みなさんが想像している以上に、すごい力があるんだと。

福祉施設の学びの力

ふくしデザインゼミでも、学生たちが、みなさんの仕事場に滞在させてもらい、話を聞かせてもらいました。「滞在」は、見学でも視察でもなく、「ただ、いる」ということ。見学や視察では、職員さんから案内された場所しか見ることができませんし、時間も限られますが、ある意味で無目的に時を過ごし、そこに流れている空気や時間をともにしてはじめて感じられるものがあると思うんです。

学生たちは、私たちの想像以上にいろいろなものを発見しています。なぜ、彼らはそうしたものを発見できるのでしょうか。みなさんの現場にそれだけの力があるからだ、としか言いようがないません。だからこそ、その力を福祉施設のなかにとどめることなく、地域に拡張していく方法はないだろうか。それをひらくはどうすればいいのか。そんなことを考えてきました。

人の「老い」や「死」は、ますます見えにくいものになっています。「障がい」もそうかもしれない。私たち健常者の多くは障がいというものを知らずに育ち、また、多くの場合、福祉施設は郊外にあるため、障がいのある人たちの暮らしがどうなっているかを知る機会はほとんどありません。おまけに、福祉を必要とする人はこれからますます増える(特に高齢者領域)。

このような時代にあって、ふくしデザインセンター構想は理想論ではなく現実論です。福祉施設が持つ社会的な機能を育て、発信していく必要があると思います。

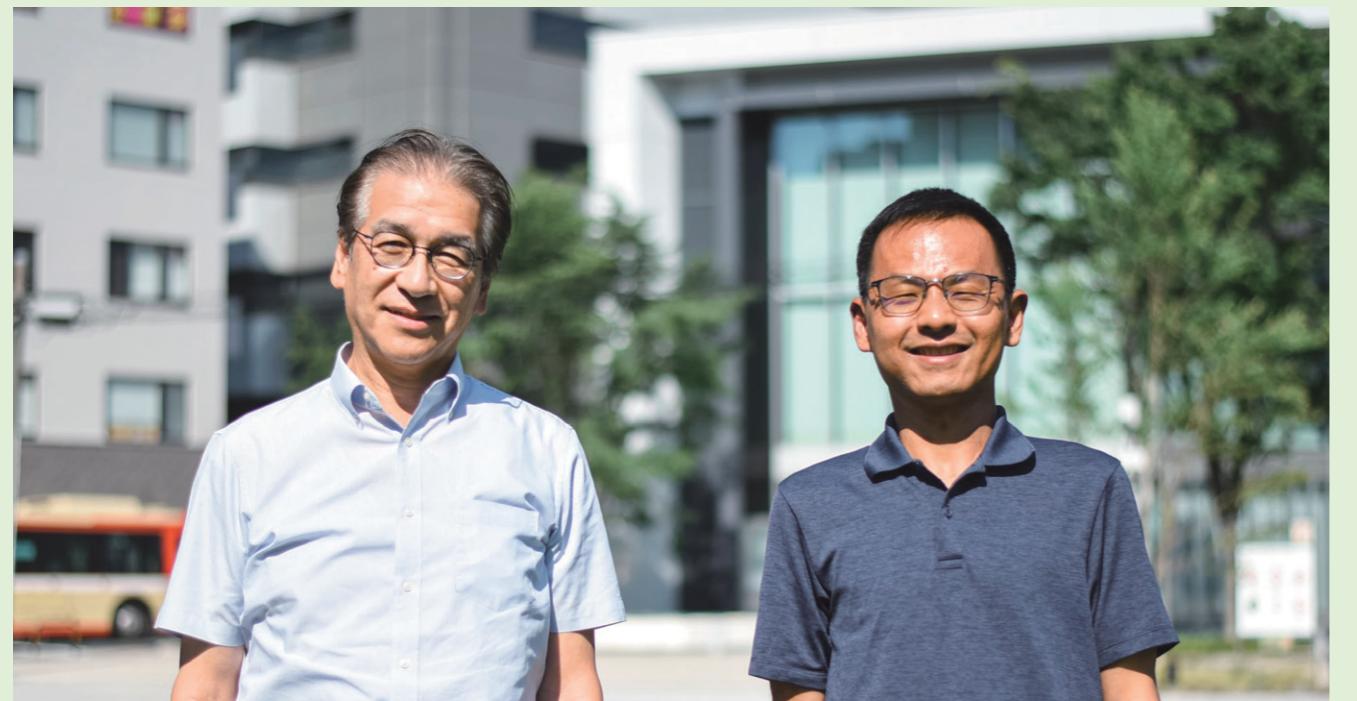
ここまで長々と書いたように、福祉施設には、「ふくし実践者」を育てる力があります。地域の教育機関や民間企業と福祉を結ぶラーニング・ハブとして機能させていくことができれば、福祉/ふくしの価値を向上させていくことができるし、そのプロセスで、福祉の関係人口も増えていく。私も、さまざまなことを学ばせてもらいたいと思っています。引き続き、福祉に関わるみなさんの力を借りできたらうれしいです。

小松 理虔 (こまつりけん)

1979年福島県生まれ。地元いわきでヘキレキ舎を立ち上げ、商店街でオルタナティブスペースUDOKUを運営しながら、食や観光、医療福祉など幅広い分野の企画、情報発信に携わる。いわきの地域包括ケアの取り組み「igoku」でグッドデザイン賞、初の単著『新復興論』で大佛次郎論壇賞を受賞。『地方を生きる』など、ローカル関連著作も多数。

ふくしをひらく それは、福祉を守り、育てること

高橋 信夫 社会福祉法人武藏野会 理事長 ✕ 今津 新之助 一般社団法人ぼくみん代表理事／ふくしデザインセンター設立準備室 総括ディレクター



今津 2年ほど「ふくしデザインセンター構想」の取り組みに伴走してきて、今改めて、理事長にはじめてお目にかかった時ことを思い出しています。あの時、福祉の取り組みを社会インフラにしていこうという話を理事長はしていました。これから社会構造を考えたとき、福祉の担い手はどうしたって足りなくなっていく。武藏野会の多様な場を、ある種の公共財にしてしまうことで、地域の人たち、若者たちと本当の意味で学び合っていく場をつくっていくんだと。

高橋 そうでしたね。今津さんとは偶然にも、教育学者の林竹二を敬愛しているという共通点もあって、教育や学びというテーマで盛り上りました。そのときにも話ましたが、武藏野会は法人の規模から言っても地域社会に対する一定の責任があると思っています。地域を担っている法人の方々とも連携をして、学生や地域の人たちと学びえる場をつくりたいと、そんな話を一緒にさせていただきました。

今津 武藏野会のみなさんの協力で、1年目も2年目も、多くの若い世代がプログラムに触れてきました。そして、自分自身のものの見方を変えてくれました。理事長は、もともと制度だけで社会福祉は完了しないとおっしゃっていましたよね。

そうした理念が少しづつ伝わってきていたと感じますし、採用・リクルートでは結果も伴ってきました。まだまだ道半ばではありますが、武藏野会が大事にしたいものが、さらにその外側にも伝わっていったらいいなと思っています。

高橋 私も手応えを感じています。これからの時代の福祉事業は、地域の人たちとともに進めていく必要があります。もちろん、武藏野会に若い人を集めたい、採用したいという気持ちはありますが、それは「結果的に」でいいんです。まずは、福祉的にものごとを考えてくれる人たち、私たちの言葉で言えば「隣人愛」と一緒に考えてくれる人が増えることで、福祉全体が変わっていくことを期待したいです。若いみなさんには、とても柔軟だし、我々にないものを持っていると感じます。この2年でいろんな下地ができ、目には見えない広がりを感じています。

他者がいるから、変わることができる

今津 広がりが出てきたのは、理事長が「福祉とはなにか」の前に「人間とはなにか」を問うてきたからだと思うんです。「自己覚

知」と「相互変容」という言葉を、武藏野会のみなさんは掲げていますよね。これはつまり、我々にとって他者とはなんなのかという問いだと思います。他者がいるからこそ私というものは人間になれる、とすら言える。けれど、そうは思いつつもなかなかできることではありません。だからこそ理念を大事にしようというミクロな感覚を持ち、その気持ちを持つ人を増やすことで人口減少社会に対峙するんだというマクロな視座で社会を見ていく。理事長にそういう問い合わせや視座があったからこそご一緒できたんだと改めて感じています。

高橋 私がもともと福祉の外から来たということに関係があるかもしれませんね。武藏野会に入職したころ、強い違和感がありました。入所されているみなさん、お昼の3時からお風呂に入ります。でもなんでこんな時間に入るんだろうと。そして、利用者は裸なのに職員は服を着てるわけです。それで本当にリラックスできるのかなと思いました。だから私も裸で入りました。怒られましたけどね。福祉というものは、どうしても制度に縛られてしまうところがあります。だから、もっといろいろな方々と学び合いながら話をしていくしかないといけない。考えが硬直してしまうんです。

今津 福祉に限らず、みんなが「他者とともに生きる」ということを掲げます。でも、そう言いながら他者と出会えなくなってしまう。だからこそ他者と遭遇して、わからないこともたくさんあるけれど、一緒になって粘り強くやっていくんだと思いたいですね。これからの時代、福祉全体がこういう取り組みをしないと成立することすら難しくなっていく。でも、それをひらいでいけたら、社会福祉の存在意義を実践を通じて示すことができると思います。

施設の外側に「ふくし」をひらくこと

高橋 あと5、6年もすれば、高齢者施設は破綻していくところが増えるでしょう。90歳を超えるような方々を在宅で看るという家が増えていく。つまり、施設の外側にも福祉が必要になってくるわけです。福祉職が増えればいいというわけではなくて、福祉的に考えていく人を増やしていくということが重要です。

今津 そういう気持ちが法人の内部に伝わり、職員を通じて、地域の人たちや若者たちにも伝わっていく。その結果としてリクルートにつながるということだと思います。それぞれの法人ができる事をやっていくという、ある意味で「道なき道」を選んでいかなければならない時代なので、制度の枠に守られながら進もう、というのでは成り立ちませんよね。

高橋 ある程度規模の大きな、私たちのような法人の役割になると思いますが、得られたノウハウをみなさんと共に共有していく

ような動きを、今後はさらにつくっていきたいと思いますし、その意味で、昨年のふくしデザインゼミで長崎の南高愛隣会さん、滋賀のゆたか会さんと連携できたことは大変よかったです。法人同士が連携して一緒になってやっていくことで、こうした機会は今よりも多くなることができるはずです。

今津 今の時代、福祉に関わるどの法人も大変だと思いますし、施設運営のことだけで手一杯だと思います。だからこそ補い合って一緒にになって、地域福祉を形づくるような関係人口づくりを進められたらと思っています。そのためにも、僕たちは間に立つ媒介として、言葉やデザインを尽くして伝えていくことで、巻き込んでいく。自分たちのミッションに改めて気づかされる、そんな機会になりました。

高橋 私もそう思います。これからますます、多職種のみなさん、そして若い人たちと「ごちゃまぜのふくし」について話す機会が必要です。その過程で、企業のみなさんとも話をする必要が出てくるでしょうし、地域の学校とも話をしていく。そして関係人口を増やしていくことが、結果的に福祉を守ることにつながるんだと改めて思います。3年目も、よろしくお願ひします。

高橋 信夫（たかはし のぶお）

1954年熊本県生まれ。明治大学卒業後、証券会社勤務を経て、1982年武藏野会に入職。2017年に理事長に就任。これからの時代の福祉法人のあり方を模索し、「ふくしデザインゼミ」や「仲間さがし」など新たな挑戦をつづける。東京都社会福祉法人経営者協議会副会長、一般社団法人生きにくさを抱えた障がい者等の支援者ネットワーク理事など、都や国全体の社会福祉の発展に尽力する。

今津 新之助（いまづ しんのすけ）

1976年大阪府生まれ。京都大学教育学部を卒業後、2001年に沖縄移住。人づくり、仕事づくり、地域づくりを行うコンテクスト・カンパニーを経営。SOCIAL WORKERS LABを経て、2023年に、10代20代の若者とともに領域横断的なプロジェクトを手がける「ぼくみん」を創業。ひらかれた対話と協働の場づくりを通じ、分野・領域を飛び越え、一人ひとりの持ち味と可能性が發揮される仕事づくり、チームづくりに取り組む。